

▶ セーフティ・ファーストエイド研修を実施して ◀

横浜市青葉消防団

1. 横浜市青葉区について

青葉区は、人口約31万人、面積約35km²で、平成6年11月に行政区再編成により誕生しました。『丘の横浜』と呼ばれ丘陵が多く、また、区の中央部を鶴見川が流れており、これに沿って田園風景が広がる緑豊かな景観を望むことができます。

街では、区内の芸術文化を振興する様々なイベントや、区内にキャンパスを有する6つの大学と連携した公開講座が開催され、また、区内の美味しい店を『青葉ブランド』と認定し、区内外に発信するなど魅力あふれる街づくりに地域、民間、行政が協力して取り組んでいます。



マスコットキャラクター
『なしかちゃん』

2. 横浜市青葉消防団について

青葉消防団は3個分団24個班で構成されています。定員は485人で、ここ数年団員募集に力を入れた結果、平成30年12月1日現在では、団員充足率100%を達成しています。

特に学生消防団員の増加が目覚ましく、平成29年10月にはその功績に対し総務大臣から感謝状が贈呈されました。こうしたことを契機に平成30年6月に区内の大学に通学する学生を中心とした『学生活動隊』を横浜市で初めて編成し、毎月の訓練の他、防災指導要領を学び、区内大学の学園祭に参加した際に消防団PR活動や防災啓発活動を行うなど、学生消防団員も一般団員同様に積極的に活動しています。



学生活動隊のホース延長訓練



学生活動隊が参加したDIG訓練

3. 今回の研修実施の経緯について

青葉消防団は前述のとおり多くの学生消防団員が在団しており、発災時には各大学を拠点に避難所運営の補助や負傷者の救護を主な任務としています。学生消防団員だからこそできることはないか、避難所等でリーダーシップを発揮できる場面はないかなどを考えていたところ、被災者等に対する心理的応急処置(PFA)や、任務中の不測の事態に対する対応を学べる『セーフティ・ファーストエイド研修』を知り、今回の研修を実施することになりました。

4. 研修の概要

平成30年10月28日(日)に青葉消防署にて行

われ、青葉消防団の学生消防団員16人が受講しました。講師として、国立病院機構災害医療センターの医学博士 河寫 譲先生、陸上自衛隊 中央輸送隊 健康管理室の笛木 徳之先生、厚生労働省D-MAT事務局 小森 健史先生にお越しいただきました。

研修では、任務中の不測の事態（活動中の団員の負傷）に対応するための応急手当訓練とPFAの基本となる災害時メンタルヘルスケアについての講義を受講しました。

応急手当訓練では、災害現場や訓練で起こりうる事故を予測する訓練や、実際に事故が発生した際の対応（感染防止、エマージェンシーバンテージを用いた応急処置）をシミュレーション訓練を通して学びました。災害時メンタルヘルスケアの講義では被災者及び支援者の心理状況等を学び、PFAの重要な技術である『傾聴』をロールプレイング形式で体験し、被災者及び支援者のためのケアを学びました。

5. 研修を終えて



研修の様子（シミュレーション訓練）

今回の研修を通して、災害現場や訓練に内在する危険を予測し、対処するために必要な知識や技術と災害時における支援の在り方を学びました。

単に『助けたい』という熱意だけでは現場活動はできません。現場で活動するには、それに



研修の様子（災害時のメンタルヘルスケア講義）

ふさわしい知識（安全管理の考え方、事前準備、事故後のフォローの方法）や技術（装備を的確に扱う手技）の両方が不可欠であると訓練を通して感じました。

また、災害の大小に関わらず、被災者には計り知れないほどのストレスがかかり、身体的にも精神的にも影響を与えます。それを、被災者の心理的反応や行動を抑圧したり、支援者が無理に話を聞き出したりすることは、被災者にとっての回復にはつながりません。それだけでなく、震災時には様々な情報がSNS等で流れ被災者を混乱させ、被災者のことを考えない支援者本位の支援が問題となっています。事前に被災地を知り、被災者が何を求め、何に不安を感じているかを『傾聴』し、ニーズに合った支援や関係機関へつなぐことが大切であると学びました。ただ、被災地で多大なストレスを感じるのは支援者も同じです。支援者が元の生活に戻るためのフォローも必要不可欠です。『使命感で支援者のメンタルヘルスをおざなりにしていれば、いつ壊れたって不思議じゃない。』支援者のための支援を顧みる良い機会になりました。

最後に、本研修を実施するにあたりお世話になった河寫先生、笛木先生、小森先生、消防団員等公務災害等共済基金の皆様には厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。